

## 哲学教育ワークショップ資料

2010. 5. 15 中岡成文(大阪大学)

○「マイナス」現場で働いている非常勤講師 A さん：「哲学教育は危険ではない」「〈面倒くさい〉ところに足を踏み入れてほしい」

「哲学教育は学校では危険なのではないか？」という問い、よく研究会や学会ワークショップで耳にしますが、それは現場を知らない研究者の杞憂です。大学の先生は、そんなことを言う前に、もっと小学校や中学校や高校の現場を知るか、大学の初年度教育の学生たちときっちり接してほしい。

教室において、生徒たちとともに何でも問い、何でも議論することは、危険ではなく、「面倒くさい」だけです。多くの子どもは規範の何たるかをよく知っており、「なぜ人を殺してはいけないんですか？」「なぜ授業中に私語をしてはいけないんですか？」と問う学生がいるとすれば、それは既存の規範に乗っかって、ただ人をおちょくってみたいだけか、先生の反応を見ているだけです。〈面倒くさい〉です。

○A さん：「自分たちでルールを決めるワークを嫌がる大学生」

某大学で「道徳と現代倫理」という教養科目を受け持っていますが、半数くらいの学生は、他律と無責任のほうが好きみたいです。

授業の最初には、（教師がルールを提示するのではなく）みんなで、この授業すべきこと、すべきでないことについて考えて、自分たちで授業のルールを決めよう、というワークをしています。

このワーク、（私が「対話」の授業をしにしている）小学2年では支障ありませんでしたが、大学生170人だと50人くらいはすごくやりたくなさそうにします。下手したら、それだけはやめて、という感じの人もあります。原因はまだ観察中ですが、どうもこうしたことについて自分で考えたり、責任を負うのが嫌みたいです。残念です。道徳や倫理について共に考える／考えはじめることに困難があるのです。

○B さん（上記 A さんへのレス）：「負の学習」「大人(地域役員)だって同じ」

上のワークが大学生でだめなのは、彼らが過去に似たような経験を一度ならず済ませ、しかもその経験から「負の学習」をすでに終わらせているからでし

よう。ワークに抵抗を示す場合はまだ可愛く、はじめからじゃんけんをして担当箇所を割り当て、ワークを機械的分担作業に貶めてしまっている場合さえあります。

自主・自立的な活動とは装いにすぎず、結局なにが変わるわけでもなく、それが期待されているわけでもない。これが負の学習の内容ではないかと思いません。

その様子のひきうつしを、私は地域の役員活動の中に見ています。学生も地区の役員も、日常的に接する集団の中で、他と異なるかもしれない自分の意見を人目にさらすこと、そのうえで取りまとめと称して、無理に1つの結論に集約させられること、そういうプロセスを胃に穴が開くほど嫌います。

(ただ、地区の役員の場合、最初いやがっていたのに、ある時ふと急に能動的になる人がいます。「町会長など自分には荷が重いついていたが、前から近隣のごみの出し方で気になることがあった、この機会に何とかしよう」などと、その集団の中で自分の役割や位置が見えた時・人です。集団の中の一人からチェンジェージェントの自覚をもった一人になるとき、自分の言葉で価値を語るようになります)

現在の日本の集団で、純粋に論理的思考実験として仮説を生み出し提示し合うなどということは起こりにくいです。

クラスという、生徒にとってもっとも身近な社会で、傷つきたくたかったり、カッコつけたかったり、慎重に位置取りを見極めたりするのは、前青年期・思春期の人間にとっては自然なことです。教師にとっては、当人たち(生徒)が暮らしている世界・社会への配慮なしに道德の授業はすべきではないと思います。